

会員の広場



「大学開放」の在り方をめぐって

——富山大学における実践から——

富山大学地域連携推進機構教授 藤田 公仁子

はじめに

周知のように、富山県は新潟と石川県にはさまれた北陸地域に位置しています。北部は日本海・富山湾に面し、南部には日本アルプスがそびえ、標高差が4千メートルに近い豊かな自然は、多くの自然の恵みをもたらしてくれています。

富山県では教育に対する関心は非常に高く、「教育県」と呼ぶことは多いようです。それは、富山大学の公開講座受講者の6割が「短大・大学・大学院」の卒業・修了であるという、学歴の高さとも関連しているものと考えられます。

富山大学地域連携推進機構生涯学習部門（以下、地域連携推進機構生涯学習部門と略します）は、JR富山駅からはバス・電車で約15分ほどのところにあります。平成16年に独立行政法人となり、翌年、それまでの富山大学、富山医科薬科大学、高岡短期大学、の3つが合併しました。建物・キャンパスはそのまま存続し、それぞれ五福キャンパス、杉谷キャンパス、高岡キャンパスとなっており、生涯学習部門は五福キャンパスに設置されています。

これまで「生涯学習教育研究センター」という全学組織が生涯学習・大学開放を中心に推進してきましたが、平成20年に機構改革で「地域連携推進機構生涯学習部門」となったのです。現在、部門長（兼務）1名と専任教員2名が配置されています。事務スタッフは、研究振興部社会貢献グループの地域連携チームが担当しています。

本稿では、富山大学の行っている大学開放事業について、報告します。

1. 地域生涯学習の推進

地域連携推進機構生涯学習部門が実施している市民向けの「大学開放」事業は、主として、（1）住民に学習機会を提供する公開講座、（2）「オープンクラス」、（3）生涯学習相談・講師紹介等に大別されます。

公開講座は、多様なテーマ・内容で、年間約80の公開講座が開催されています。多くは教養を深めたい、専門的な知識を修得したい、という受講者を対象として実施されています。ジャンルで最も多いのが「一般教養」で約6割を占めており、ついで、「語学」が約3割、この他、「体験」や「健康・スポーツ」の講座が実施されています。語学関係の講

座では、受講者の語学力に配慮して、少人数での講座としておこなっています。平成 22 年度の受講者総数は 946 名、延べ約 1 千人の受講者数になっています。

受講者の男女比率は、男性 301 名 (35.5 パーセント) に対して女性 546 名 (64.5 パーセント) で、女性の方が非常に多くなっています。社会教育・生涯学習の場に参加するのは、概して女性が多いのですが、「公開講座」においても同様の傾向にあるということでしょう。受講者の平均年齢を男女別にみると、男性が 55.5 歳であるのに対して女性は 47.0 歳でその差 8.5 歳は必ずしも大きいとはいえませんが、概して男性の場合は現役を退いた高齢者が多いことを反映しているということでしょう。

公開講座は、専門委員会 (各学部の代表で組織されている全学組織) で協議を踏まえて各学部へ募集するもの、生涯学習部門がコーディネートをして開講しているものがあり、3 キャンパスを会場として開催しています。

生涯学習部門が設置されている「五福キャンパス」は、電車・バスでのアクセスが可能ですが若干市の中心部から離れています。これに対して、富山市内の J R 富山駅前のビル内 (cic ビル 3 階) で、市民がより使用しやすい条件で事業を実施している「サテライト公開講座」では年 8 回、開催されています。平成 22 年度の実績は、延べ 437 名の受講者になっており、1 講座当たり 54.6 名で比較的多くの受講者数となっています。これは講座のテーマ・講師の知名度なども関係してくると思いますが、何よりも会場の便利さが大きく影響していると考えられます。

年に 1 度開催されている「コラボフェスタ」という事業は、「地域連携推進機構」を構成している 4 部門 (産学連携部門、地域づくり文化支援部門、地域医療保健支援部門、生涯学習部門) が地域との連携強化に資することを目的として実施している事業で、研究紹介やシンポジウムなどを実施し、好評を得ています。

次に、「オープンクラス」について紹介します。これは、学生が受講している正規の授業を一般市民にも受講できるようにしたもので、前期・後期合わせて約 1000 科目前後の授業が用意されています。最近では、こうした「授業公開」を実施している大学が増えていますが、富山大学の場合は、学内の理解を得ながら教員の個人裁量による授業公開を展開しています。教養科目だけではなく専門科目も受講可能で、受講者の希望 (一般教養を深めたい、職業に関連する知識を修得したい等々) に応えることができるよう、学習環境を整えていきたいと思えます。「オープンクラス」の平成 22 年度の実績は、開講授業数が前期後期合計 969 科目、受講希望者は科目数では 189、受講希望者数ではのべ 402 名でした。

この「オープンクラス」の一部は、「高大連携」の取り組みの一つとして位置づけられています。講義の最終日には、受講者の成果発表会を開催しています。

公開講座とこの「オープンクラス」との関係は、いわば相互に「受け皿」になっている、と言えるでしょう。公開講座を受講した後、さらに学習を続けたいと思うようになり、「オープンクラス」を受講する、という例です。逆に、「オープンクラス」で一定の知識を得た修了者が公開講座を受講する、という例もあります。

また、「公開講座」や「オープンクラス」の受講者が、休憩したり交流、生涯学習部門の専任教員による生涯学習相談できる場として「サロン」が今年度五福キャンパス内に開設されました。地域住民が大学を活用して学ぶ上で、少しでも条件整備していく試みです。

以上のような公開講座・オープンクラスその他、「地域と連携し、大学の知の公開の窓口となる」ということで、学習相談を行っています。個人を対象として、資格取得を図る上で大学でどのような講義を受けることができるか、といった学習を進めていく上での相談に応じています。また、自治体や企業などで開催される講演会・研修会などを企画する際に、講師を紹介しています。この講師の要望の傾向としては、学習ニーズに応えるテーマの内容を研究分野に持ち、わかりやすく話せる講師を紹介して欲しい、といった内容が多くなっています。

富山県砺波地方の企業人・首長・行政職員等で構成されている「となみ政経塾」では、その教育プログラムの作成と具体的な講師の推薦などを行っています。

また、平成 22 年度まで実施したものでは、富山大学として実施している、幼児・小学生およびその保護者を対象とした「スマイルフェスティバル」という事業では、のべ 4,570 名もの参加者がありました。

2. 地域の生涯学習推進に向けて

一般市民向けの公開講座や「オープンクラス」以外にも、地域の行政・民間企業・NPO などとの協働による事業も行っています。それは、地域生涯学習を推進していく事業の一つとして実施しています。

「ふるさと文学講座」は、富山県と共催で実施している事業で、全部で 4 回の講座となっています。富山に縁のある文学や、富山県出身の作家に関わる内容等で、テーマ・内容を設定しています。

「専門的な指導者の養成」として、社会教育・生涯学習にたずさわる職員や自治体職員のための研修事業も行っています。平成 22 年度には、NPO で実際に活動している、また NPO に興味関心のある人、NPO と協働で取り組みながら仕事を進めている自治体職員などを対象とした講座を実施しています。

この他、中小企業同友会と連携した事業として、主として経営者を対象として、「経営者大学」を実施しています。富山の置かれた経済的状況や今後の地域経済・日本経済の発展方向などについてのテーマを多く設定をしています。

北陸地区の大学が連携した事業として、「まちなかセミナー」が開催されています。「まちなかセミナー」は、富山大学・金沢大学・福井大学・北陸先端科学技術大学院大学の 4 大学が連携して実施している事業で、「社会貢献」という、今日の大学に求められている社会的役割を果たすということで実施しています。会場は、富山大学・金沢大学・福井大学・北陸先端科学技術大学が持ち回りで開催されています。

こうした地域の他機関・団体と連携した事業を追求することを基盤として、平成 23 年度では、「とやま 311 ネット」という NPO と連携した事業から学ぶことも多かったです。この NPO の活動は、東日本大震災以降、富山県には被災地を離れて約 500 名（平成 23 年 11 月現在）が避難してきていますが、それらの人々の生活を支え、富山での生活を少しでも楽しく暮らす条件を整えようとして、様々な事業に取り組むネットワーク「とやま 311 ネット」が立ち上がりました。具体的な活動として、県民から様々な家電製品や生活用品の募集・収集し、避難された方へ必要な物資を届ける活動からスタートしました。その後、

富山の名所で「お花見」をしたり観光地を訪れる「ようこそ富山へ」という事業を設定しながら、「富山を知ってもらう」ことや、「交流を目的としたネットワークづくり」を展開しています。8 月には富山の中心街で、「東日本盆踊り大会」を開催しました。そのような事業の広報をする際に、同時に富山大学の大学開放プログラムの広報も連携をしながら展開しています。そこには、多くの組織・企業・団体・NPO が結集していますが、その一端に大学の存在もあります。富山大学地域連携推進機構生涯学習部門は、この NPO の協力団体の一つとなっています。

3. 調査研究活動

以上のような事業を行う上でも、重要なものは調査研究活動です。生涯学習を基盤とした調査研究として、「生涯学習プログラムの研究開発」や、「生涯学習に関わるニーズの調査・分析」、「生涯学習分野の大学開放プログラムの研究・開発」、といったテーマ・内容を含むものです。公開講座等の学習機会に参加している受講者の「生涯学習活動」（日常生活における生活の営みと情報の収集活動・社会参加状況等々）から、日常的に「自己教育活動」を追求している学習者の学習活動にいたるまで、「生涯学習」をテーマにした研究を展開しています。

これまで紹介してきた活動について、外部の方々の意見を受けとめようと、「生涯学習教育研究センター」時代から、「大学開放」について年に一度ですが、「富山大学大学開放懇話会」を開催しています。この懇話会委員には、富山県および富山市の教育委員会、メディア関係者、地域の多分野の識者の代表が参加し、意見や提言を承っています。

この懇話会では、「地域」から見えている「富山大学」というものが映し出されます。歴史的に果たしてきた「地域の大学」としての実績と、「地域からの期待」が反映されることとなります。因みに、平成 22 年度に実施した「富山大学大学開放懇話会」には、委員として富山県教育委員会生涯学習課、富山県民生涯学習カレッジ、富山県生涯学習団体協議会、日本放送協会富山放送局、富山市教育委員会市民学習センター、北日本放送株式会社、株式会社北日本新聞社、富山県立小杉高等学校等の様々な立場から地域を代表したご意見をいただきました。

こうした「外部」からの「生の声」を聞いたり、受講者のアンケート調査などをふまえ、今後の地域連携推進機構生涯学習部門の活動を充実させ、富山大学の「大学開放」を発展させていきたいと思っています。

4. 今後の課題

今後の課題について若干触れたいと思います。

第一に、「学習に関するニーズ」と「大学として提供できる教育機会・教育機能」との関連で、調査研究を基礎として具体的に「生涯学習プログラム」を開発していくことです。多様な地域における生活課題・地域課題に関する調査研究を行うとともに、そうした課題の解決と「大学開放」との関連を実践的に追究することです。

また今日では、社会人現役世代から退職した高齢者まで、年齢層は大きく広がってきており、また、個人の興味関心や学習ニーズも多様化しています。そうした状況をふまえて、学習機会を提供していくことが必要です。

第二に、公開講座を全学的な取り組みとして企画実施しているのですが、「学部」と受講希望者との間を「生涯学習部門」が結び、コーディネーターとしての役割を果たしていますが、今後より積極的に、より実効性が上がるように、その役割を果たすことが求められています。

第三に、受講料について触れたいと思います。現在の公開講座はすべて有料で開講されていますが、受講者層の固定化という傾向が生まれており、受講者層の拡大という意味では、無料講座も含めた受講料の見直しなどの多様な対応について考える時期に来ていると考えます。

第四に、大学としての「中期計画・中期目標」に、公開講座の開設目標が数値化されていることです。数値化することで、必要以上に教員・事務職員に負担を強いる結果にならないことを強く願っているところです。勿論、地域の生涯学習ニーズに対応した講座、大学側が提供したい講座等、本当の意味での必要とされている公開講座を開発し、積極的に設定していく必要があります。

第五に、地域生涯学習ネットワーク形成の課題について触れたいと思います。ネットワークを構成する組織・団体としては、行政・企業・NPO 等、多様なものが考えられます。とりわけ「公的社会教育」との連携が重要だと思いましたが、そのためには社会教育・生涯学習部門担当の職員の専門性を向上させることが課題であり、大学としても専門性を向上させるための研修の場を積極的に設定することが必要とされていると思います¹⁾。

このような地域生涯学習推進のネットワーク形成を展望した場合、大学として地域生涯学習の推進により積極的に貢献する課題が挙げられると思います²⁾。行政・企業・NPO などとの協同による取り組みの発展も見られますが、地域生涯学習の一層の発展を展望していくためには、「大学開放」を多様な形態・内容で追求していくことが必要とされていると考えます。

結び

筆者が富山大学に着任してからこれまでの実践をふまえ、「大学開放」の事業について概括してみました。未だ 3 年目に入ったばかりということで、必ずしも十分地域の状況を把握できているとは言えません。それでも、以前勤務していた岩手大学での研究と教育・地域貢献の実践をふまえ、また、富山大学が積み重ねてきた「大学開放」の歩みを振り返ってみました。そこから、地域住民の「学びの場」を提供する他、行政・企業・NPO などとの連携による事業も多様に展開していると思います。しかし、今後、いっそう住民が学びやすい条件づくりをはかり、地域生涯学習を推進していく上で、より積極的に他団体・機関等との「協働・協同」が求められている、と考えます。生涯学習をツールとした「富山大学ブランド」を確実に構築していくことも可能であると期待しながら日々取り組んでいます。

* なお、本稿は、2010年12月に実施された全日本大学開放推進機構の研修会での報告を基礎とし、全日本社会教育連合会『社会教育』(2011年4月号)に掲載された原稿「生涯学習の推進をめざす地方国立大学の大学開放」を大幅に加筆したものです。

【注】

- 1) 地域生涯学習の推進を図る上で、現職のスキルアップを含めた「社会教育専門職員」の養成が問題となるが、この点については、拙稿「社会教育・生涯学習専門職員の力量形成と大学開放」(『富山大学地域連携推進機構生涯学習部門年報』、第12号、2010年)を参照。
- 2) 地域生涯学習と「大学開放」との関連では、拙稿「今日的な大学の役割と地域生涯学習の方向性—持続的な発展を目指して—」(『富山大学地域連携推進機構生涯学習部門年報』、第13号、2011年)を参照。



公開講座「マリ・クリスティヌと異文化の旅」



コラボフェスタ

藤田 公仁子 (ふじた・くにこ)

1959年北海道生まれ。北海道大学大学院教育学院研究科博士後期課程を岩手大学就職のため中退。岩手大学講師、助教授、准教授を経て、2009年より富山大学地域連携推進機構教授。著書・論文として、『生涯学習を組織するもの』(共著、北樹出版、1997年)；「地域生涯学習の展開と大学開放」『大阪教育大学教育実践研究』第3号、2009年3月；「社会教育・生涯学習専門職員の力量形成と大学開放」『富山大学地域連携推進機構生涯学習部門年報』12巻、2010年3月。岩手県生涯学習審議会委員・岩手県社会教育委員、盛岡市社会教育委員等歴任。平成23年度「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」評価委員、全日本大学開放推進機構会員。